

青年の甘えと社会的適応に関する発達心理学的調査研究

“Amae” and Social Adaptation of the Young

篠原しのぶ・原崎聖子

キーワード：甘え 経済意識 人間関係 生活意識 日中比較

はじめに

日本の風土と深い関係のある「甘え」は、今日の社会の中でどのように受け止められているのであろうか。「甘える」という現象は、乳幼児期のみならず、児童期・青年期・壮年期・老年期においても、それぞれの時代に特有な形で認められるものである。また、このような行動は、他者の側から見ると、『甘えさせる』という意識や行動を伴うことから、他者の成熟をうながすものでもあると考えられる。したがって、親が子供を、上の子が下の子を、強者が弱者を『甘えさせる』という行動をとおして、彼らは、満足感や自己効力感を味わうであろうし、それと同時に、忍耐力をも必要とすることになるであろう。

『自分は甘えることはありません』と宣言している人の中には、暗黙のうちに『他者から甘えられることは嫌いです』というように、自分の価値観を他者に無理やり押しつけながら、自分ばかりが相手から甘えられることによって被害者になっているという意識にとらわれる人もいるようである。

確かに、甘えの度合いによっては、明らかに人格的に未発達であるとみなされる場合もあるが、甘えの形や程度に関しては、年齢や性別による共通の基準はないと考えてよいのではないだろうか。現在に至るまでに自分の周辺に存在する他者が、その甘えをどの程度許容してくれたかということが、「甘え行動」を決定しているものと思われる。十分に甘えを享受できたものが、十分に他者よりの甘えを受け入れられる存在へと成長していくことが重要であろう。

また、甘えを許容する場合には、それを受け入れる者に、精神的、物質的なゆとりが必要であろう。その意味で青年期は甘える立場から、甘えさせる立場へと上手に変化していくことが期待されている時期であると言える。

そもそも、個々人の生活意識や価値観は、この世に生を受けて以来どのような環境の中で成長したかによって大いに差が現れるものである。自然環境、両親の養育態度、きょうだいの組合せ、友人関係、宗教・文化的背景等々、影響源である環境の種類は多岐にわたっている。

日本においては特に人的環境からの影響力が非常に大きい。例えば、身近にいる親を中心とした年長者から、良いことは誉められ、悪いことは叱られる中で善悪を身につけていくであろうし、きょうだいや友人のように周りにいる年齢の近いもの達の態度・行動によって自らの行動をコントロールしながら育つのである。そのような現象の一つとして、青年達は、経済的自立観念をも成長させていくのである。

今回の研究では、このように青年を成長させることに重要な役割を果たすと考えられる「青年を取り巻く環境」と、彼らの抱いている「経済意識」とに重点をおき、これまでにわれわれが捉えてきた日本青年の「甘え因子」との関係を、教育心理学的にそして発達心理学的に検討を進めていくこととする。従って今回は下記のような4つの観点からの研究結果をそれぞれ報告する。

- ①青年の甘えと出生順位・居住形態との関係
- ②青年の甘えと経済意識・生活意識との関係
- ③中国青年女子と日本青年女子の経済意識の比較
- ④福祉関係者と青年の「甘え」・「社会的適応」についての発達の検討

研究Ⅰ. 青年の甘えと出生順位・居住形態との関係

対象：大学生女子 228名

内容：甘えに関する質問 30問（5段階評定）
経済意識に関する質問 40問（5段階評定）
生活意識等に関する質問 30問（5段階評定）

期間：平成13年6月

この世に生まれてきて最初に所属する集団である家族の中で、その出生順位により、立場が異なることは言うまでもない。従来、長子は次子が生まれた瞬間に「甘える」ことを制限され、「甘えさせる」ことを学習しなければならなかったし、末子はいつまでも「甘えつづける」ことが暗黙のうちに許容されてきた。そのようなことを受けて、今回まず、出生順位による「甘え」の差に着目してみた。各々の平均と標準偏差を表1に示す。

表1. 出生順位と「甘え」因子の関係

	長子	中間子	末っ子	一人っ子
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
引っ込み事案の甘え	14.94(3.81)	15.21(4.48)	15.36(3.76)	15.00(4.72)
受容・承認を求める甘え	18.92(3.74)	19.56(3.80)	18.26(3.80)	19.93(4.35)
屈折した甘え	15.67(4.24)	15.24(4.48)	15.59(4.63)	15.73(5.39)
責任回避の甘え	13.18(3.12)	12.72(2.62)	13.30(3.16)	11.53(3.77)
非自立の甘え	18.00(3.67)	18.35(3.45)	17.72(3.41)	17.26(4.33)
追従の甘え	14.29(2.61)	13.72(2.74)	14.44(2.80)	13.86(3.13)

104名 37名 71名 15名
*下線は10%水準で有意差が見られたもの

表から明らかなように、結果は予想に反して、出生順位による明確な差は見られなかった。かろうじて見られた差も10%水準以下という傾向性でしかなかったのである。現代社会においては、きょうだい数の減少や居住状態の向上、経済的なゆとり等から、以前に比べ、いずれの順位に生まれたとしても、我慢を強いられることは少なくなり、その結果、同じように「甘える」ことができるようになったのではないかと考えられる。換言すれば、兄弟姉妹関係の中にはもはや、甘える、甘えさせるということを学習する機会は見出せないということになるのではないであろうか。また、青年期の甘えを考える場合は、出生順位の影響よりも、その後の生活体験のほうが重要であるとも言えるであろう。

そこでわれわれは次に、青年期を過ごしている現在の居住形態が、親と同居をしているものと別居しているものとに分けて、「甘え」との関係調べ、更に、彼らの経済意識の中に見る「甘え」との関係にも言及してみることにする。

表2に、居住形態別「甘え」得点の平均と標準偏差を示している。

表2. 同居・別居と甘え因子の関係

	同居	別居	t検定
	平均 (SD)	平均 (SD)	
引っ込み事案の甘え	15.19(4.09)	14.97(3.65)	N.S
受容・承認を求める甘え	18.71(3.76)	19.26(3.93)	N.S
屈折した甘え	15.36(4.36)	16.05(4.66)	N.S
責任回避の甘え	13.01(2.95)	13.09(3.47)	N.S
非自立の甘え	18.04(3.46)	17.66(3.86)	N.S
追従の甘え	14.29(2.65)	14.06(2.89)	N.S

(155名) (72名)

その結果、居住形態によっても、これまでに抽出された6種の「甘え」因子間に有意な差は全く見出されなかった。しかし、甘え因子に含まれる30個の設問を個々に見てみると、かなりの差が見出される項目があった。その代表的なものは次のとおりである。

“さびしがり屋である”“責任感がない”等は、別居学生のほうが、また、“自立していないと感じる”“未熟だと感じる”等は、同居学生のほうがそれぞれ5%水準で高得点を示していた。

この結果から推察すると、同居学生は、高校生活までの延長線上で日常生活を送っているために、あらゆる場

面で親の手を借り、その結果、生活の中で自立意識が低く、未熟であると感じるに至っていると考えられる。

そこで、われわれは新たに、日常生活の中でも特に、青年の経済意識に焦点を当てて質問項目を作成し、これの検討を試みることにした。表3に、同居・別居別に見た経済意識の平均値と検定結果を示す。両者を比較すると、次のとおりである。

まず、同居者のほうが高得点を示した項目は、“アルバイト等の収入は全部自分が使用する”、“気に入ったものは高くても買う”、“化粧品・服は自分のお金で購入する”等であり、別居者のほうが高得点を示した項目は、“親に経済的負担をかけている”、“無駄遣いしないように気をつけている”、“今月はあといくらで暮らさなければ

表3. 同居・別居による経済意識の有意差

内 容	同居		別居		検定
	平均	SD	平均	SD	
学費は全て親が出している	4.63	0.98	4.76	0.81	NS
お金は働いて手に入れるものだと思う	4.63	0.66	4.65	0.79	NS
借りたお金はきっちり返す	4.56	0.07	4.56	0.73	NS
親に経済的負担をかけていると思う	4.47	0.85	4.69	0.73	+
もっと自分で稼ぎたい	4.37	0.82	4.20	1.00	NS
アルバイト等の収入は全部自分が使用する	4.17	1.00	3.87	1.15	*
無駄遣いしないように気をつけている	3.75	1.04	4.09	1.16	*
社会人になったら一人暮らしをしたいと思う	3.91	1.47	3.66	1.60	NS
将来は親の面倒を見てほしいと思う	3.76	0.92	3.97	1.04	NS
貯金をしている	3.78	1.37	3.70	1.46	NS
今月はあといくらで暮らさなければと思うことがある	3.51	1.40	3.95	1.32	*
高い物は事前によく調べてから購入する	3.71	1.12	3.62	1.29	NS
家庭の経済状態を理解していると思う	3.63	1.07	3.73	1.02	NS
習い事や車の免許にかかる費用は親が出してくれる	3.43	1.35	3.69	1.21	NS
気に入ったものは高くても買う	3.54	1.07	3.27	1.20	+
買うものをあらかじめ考えてから買い物に行く	3.41	1.47	3.54	1.43	NS
成人式など服にかかる費用は親が出すものだと思う	3.35	1.13	3.48	1.17	NS
バスなどを使わずに徒歩・自転車で用事を済ます	3.20	1.23	3.58	1.18	*
お金をためることが好きだと思う	3.33	1.13	3.27	1.12	NS
家庭の経済状況について親と話すことがある	3.28	1.31	3.37	1.27	NS
お金がなくなったら親に頼る	3.17	1.28	3.22	1.34	NS
アルバイトは生活のためにしている	3.08	1.24	3.44	1.39	+
お金を使うことが好きだ	3.20	1.14	3.22	1.10	NS
親にもったお金では遊べないと思う	3.00	1.04	3.45	1.16	**
旅行に行く時などは親に賤別をもらう	3.07	1.35	3.36	1.67	NS
衝動買いが多い	2.85	1.54	2.91	1.37	NS
普段でも必要といえば親はお金をくれる	3.06	1.31	3.22	1.37	NS
ブランド物には興味がない	2.97	1.33	2.88	1.62	NS
学生の間は親のスネをかじりたいと思う	3.05	1.06	2.95	1.21	NS
人におごるのは気持ちが良い	3.02	1.04	3.02	1.35	NS
お金のやりくりは慣れている	2.91	0.10	3.13	1.25	NS
月に決まった小遣いをもらっている	2.61	1.68	3.33	1.67	**
社会人になっても金銭的に困った時は親を頼ると思う	2.73	1.22	3.04	1.32	+
友人が持っているものがほしくなる	2.75	1.13	2.65	1.31	NS
友人らに食事などをおごることがある	2.45	1.06	2.62	1.10	NS
友人との旅行等の費用は親が出してくれる	2.23	1.28	2.90	1.32	**
親に借りたお金は必ずしも返さなくてよいと思う	2.28	1.06	2.25	1.20	NS
親や兄弟姉妹にお金をあげることがある	2.22	1.23	2.44	1.23	NS
化粧品・服は自分のお金で購入する	4.00	1.15	3.65	1.26	*
ギャンブル(スロット、パチンコ等)が好きだ	1.37	0.86	1.76	1.23	**

**・*・1% *・5% +・10%水準の有意差を示す NS・有意差なし

ばと思うことがある”、“バスなどを使わずに徒歩・自転車で用事を済ませる”、“アルバイトは生活の為にしている”、“親にもらったお金では遊べないと思う”、“月に決まった小遣いを貰っている”、“社会人になっても金銭的に困ったときには、親を頼ると思う”、“友人との旅行費用は親が出してくれる”、“ギャンブルが好きだ”等となっている。

以上の結果から、親に対する青年達の経済的な依存のあり方が見えてくるようである。即ち、親と同居している学生は、自分のゆとりある生活を続けるためにアルバイトをして収入を得、その収入の全てを自分が自由に使っている。これに対して別居学生は、生活費を親にも負担してもらっている関係上、節約を心がけてはいるが、経済的よりどころは事実上親であると感じ、様々な機会に親を当てにもしていると言える。

以上の結果から、青年の経済意識という観点からみれば、同居学生のほうが親離れをしているということが出来よう。

研究2 経済意識と「甘え」・「生活意識」との関係

研究1の経済意識に関する質問項目40問を因子分析したところ、6因子が抽出された。この6因子を学生の経済意識として以下の調査を進めていく。

表4に、各因子の負荷量および信頼性係数を示している。

第1因子は“親に饒別を貰う”、“旅行費用は親が出す”、“お金がなくなったら親に頼る”等7項目を含んでおり、これを「すねかじりの因子」と命名した。以下、同様にして、第2因子は“買うものを予め考えてから買う”、“借りたお金はきちんと返す”、“お金をためることが好きだ”等6項目を含む「計画的使用因子」、第3因子は“気に入ったものは高くても買う”、“友人らに食事をおごる”、“お金を使うことが好きだ”の3項目からなる「浪費因子」、第4因子は“バス等を使わずに徒歩・自転車で用事を済ませる”、“今月はあといくらで暮らさなければ”と思うことがある”、“家庭の経済状態を理解している”等4項目で「質素・儉約因子」、第5因子は“社会人になったら一人暮らしをしたい”、“もっと自分で稼ぎたい”、“アルバイトのお金は自分で使う”の3項目で「自

立志願因子」、第6因子は“貯金をしている”、“お金のやりくりはなれている”の2項目で「貯蓄志向因子」とそれぞれ命名することとした。

次に、これらの経済意識6因子と、先行研究の「甘え」[生活意識]（篠原・原崎2001）との関係について考察を進める。まず、「経済意識」と「甘え」との相関係数を表5に示し、相関が0.1%水準以上であったものについて述べることとする。

「すねかじり因子」との間に相関が見られたのは、「受容・承認を求める甘え」と「追従の甘え」で、いずれも

表4. 経済観の因子及び信頼性

各因子及び項目	因子負荷量	信頼性
因子1 (すねかじり因子)		
親に饒別をもらう	.607	$\alpha = .779$
旅行費用は親が出す	.635	
お金がなくなったら親に頼る	.728	
習い事・免許費用は親が出す	.461	
必要といえば親はお金をくれる	.524	
学生の間はスネをかじりたい	.474	
社会人になっても親をたよる	.446	
因子2 (計画的使用因子)		
買うものを予め考えて買う	.484	$\alpha = .645$
借りたお金はきちんと返す	.443	
お金をためることが好き	.476	
衝動買いが多い (逆)	-.476	
無駄遣いしないように気をつける	.529	
高いものはよく調べて買う	.427	
因子3 (浪費因子)		
気に入ったものは高くても買う	.556	$\alpha = .508$
友人らに食事をおごる	.420	
お金を使うことが好きだ	.577	
因子4 (質素・儉約因子)		
徒歩・自転車で用事を済ます	.521	$\alpha = .541$
あといくらで暮らすことがある	.491	
家庭の経済状態を理解している	.519	
経済状況を親と話す	.502	
因子5 (自立志願因子)		
一人暮らしをしたい	.430	$\alpha = .447$
自分でかせぎたい	.559	
アルバイトのお金は自分でつかう	.404	
因子6 (貯蓄志向因子)		
貯金をしている	.430	$\alpha = .449$
お金のやりくりは慣れている	.459	

表5. 経済観と「甘え」の相関

	引っ込み	受容・承認	屈折	責任回避	非自立	追従
すねかじり	0.121	0.248***	0.017	0.172*	0.193**	0.221***
計画使用	-0.044	0.015	-0.132*	-0.300***	-0.107	-0.170*
浪費	-0.227***	0.252***	0.236***	0.130	0.164*	0.146*
質素・儉約	-0.142*	0.171*	0.180**	-0.021	0.002	0.074
自立願望	-0.066	0.189**	0.123	0.039	0.100	-0.004
貯金志向	0.007	-0.164*	-0.158*	-0.245***	-0.261***	-0.092

***・0.1% **・1% *・5%水準の有意差を示す

正の相関であった。したがって、親からの援助を素直に当てにしている学生は“自分を受け入れて欲しい、認めてもらいたい”や、“他者に従いたい”という甘えが強いことがわかる。

「計画的使用因子」は、「責任回避の甘え」と逆相関が認められ、同様に「貯金志向因子」についても「責任回避の甘え」および「非自立の甘え」との間にそれぞれ逆相関が認められた。これらのことから、金銭を使用する際に計画性を持つことや、更に進んで次の目的のために貯蓄をするなどということは、青年期における責任感や自立の意識と、かなり強い結びつきがあるものと言っ

てよいであろう。
「浪費因子」に関しては、「受容・承認を求める甘え」「屈折した甘え」と正の相関が見られたのに対して、「引っ込み思案の甘え」とは逆相関が認められた。浪費

という現象は、自分を受け入れて欲しい、認めてほしいという欲求や、消極的ではいられない行動等に付随しているなんとなくいらした不安定な状態を表出する一つの方法であるのかもしれない。

更に、各「甘え因子」を先行研究による基準に照らし、「高群」・「中群」・「低群」に分けたものと経済意識との関係を見たものを表6に示す。

「すねかじり因子」は、「甘え」6因子の中の4因子において関係性が明らかとなっていることは、注目に値することであろう。

以上の諸結果から、青年期に、経済的な計画性を持ち、金銭についての感覚を磨いていくということは、自立した健全な社会人へと成長する要因として、教育心理学的に見ても、発達心理学的に見ても、非常に重要なことであると言える。

表6. 「甘え」の程度による経済観の平均点

【引っ込み思案の甘え】

	高 群	中 群	低 群
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
すねかじり	25.24(6.88)	24.55(5.74)	24.10(6.98)
計画的使用	21.77(4.00)	21.32(3.90)	22.63(4.27)
浪 費	<u>8.73(2.13)</u>	9.17(2.36)	<u>9.75(2.54)</u>
質素・儉約	<u>12.31(3.31)</u>	12.91(3.13)	<u>14.00(3.28)</u>
自立願望	12.15(2.36)	12.29(2.15)	12.18(2.11)
貯金志向	6.97(1.74)	6.40(2.03)	7.10(2.24)
	72名	106名	49名

【責任回避の甘え】

	高 群	中 群	低 群
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
すねかじり	<u>26.52(5.78)</u>	24.75(6.02)	<u>23.25(7.05)</u>
計画的使用	<u>20.85(3.96)</u>	21.36(3.81)	<u>23.08(4.15)</u>
浪 費	9.45(2.64)	9.22(2.20)	8.91(2.40)
質素・儉約	13.12(3.61)	13.00(2.87)	12.73(3.63)
自立願望	12.37(2.39)	12.22(2.09)	12.16(2.30)
貯金志向	6.16(2.12)	6.84(1.78)	6.98(2.23)
	46名	113名	67名

【受容・承認を求める甘え】

	高 群	中 群	低 群
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
すねかじり	26.24(6.27)	24.70(5.68)	<u>22.86(6.85)</u>
計画的使用	21.97(4.06)	21.47(3.94)	21.86(4.11)
浪 費	<u>10.00(2.62)</u>	8.91(2.02)	8.55(2.18)
質素・儉約	<u>13.67(3.57)</u>	12.78(2.72)	<u>12.35(3.36)</u>
自立願望	<u>12.65(2.34)</u>	12.41(1.92)	<u>11.54(2.24)</u>
貯金志向	6.47(2.30)	6.67(1.84)	7.14(1.80)
	78名	82名	68名

【非自立の甘え】

	高 群	中 群	低 群
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
すねかじり	<u>26.09(6.20)</u>	24.48(6.13)	<u>23.53(6.58)</u>
計画的使用	21.78(4.05)	21.24(3.87)	22.25(4.14)
浪 費	9.58(2.42)	8.93(2.23)	9.03(2.40)
質素・儉約	13.15(2.99)	12.68(3.38)	13.04(3.39)
自立願望	12.63(2.23)	12.12(2.22)	11.96(2.14)
貯金志向	<u>6.22(2.11)</u>	6.58(1.87)	7.40(1.89)
	74名	77名	77名

【屈折した甘え】

	高 群	中 群	低 群
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
すねかじり	25.16(6.86)	23.77(6.30)	25.02(5.91)
計画的使用	21.44(4.44)	21.38(4.12)	22.41(3.45)
浪 費	<u>9.90(2.55)</u>	8.88(2.22)	<u>8.73(2.13)</u>
質素・儉約	<u>13.65(3.35)</u>	13.28(3.19)	<u>12.00(3.03)</u>
自立願望	<u>12.81(2.13)</u>	12.15(2.05)	<u>11.75(2.33)</u>
貯金志向	6.38(2.15)	6.78(1.79)	7.05(2.01)
	77名	71名	80名

【追従の甘え】

	高 群	中 群	低 群
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
すねかじり	<u>26.53(5.94)</u>	24.37(5.81)	<u>23.11(7.52)</u>
計画的使用	21.46(4.06)	21.43(3.74)	22.84(4.43)
浪 費	9.28(2.33)	9.38(2.29)	8.59(2.47)
質素・儉約	13.36(2.92)	12.85(3.04)	12.68(4.02)
自立願望	12.31(2.32)	12.00(2.32)	12.65(1.97)
貯金志向	6.65(2.05)	6.75(1.85)	6.84(2.29)
	63名	113名	52名

* 下線は、高群と低群に5%以上の水準で高い有意差が見られたもの

表7. 経済観と「生活意識」の相関

	伝統的女性の重視	伝統的男性の重視	自己責任	親との親和性	親の厳格性	愛他性
すねかじり	0.245***	0.195**	-0.101	0.191**	0.091	0.060
計画使用	0.112	-0.019	0.113	0.194**	0.100	0.205**
浪費	0.106	0.026	0.220***	0.067	0.135*	-0.050
質素・儉約	0.185**	0.209**	0.222***	0.111	0.147*	0.221***
自立願望	-0.002	0.034	0.193**	-0.066	0.063	-0.128
貯金志向	0.027	-0.040	0.094	0.037	0.142*	0.068

***・0.1% **・1% *・5% 水準の有意差を示す

次に、わが国の社会文化的背景に大いに関わりがあると思われる「生活意識」との関係を捉えて検討を加え表7に、この両者の相関関係を示す。この場合も、0.1%以上の有意性を示したものに着目して述べていく。

まず言えることは、「すねかじり因子」と「伝統的女性性の重視」との相関が高いことである。親に対して十分な経済的依存を期待する者は、女性に対して伝統的な即ち古風な女性観を抱いているといえそうである。今回の分析に用いた調査対象者は女子の学生である。したがって自分自身に対する女性としてのイメージの中に、金銭的にも「頼る」のが女性の特色であるというイメージを作り上げているという可能性が高いと考えられるのである。

次にこれとは逆の「伝統的男性性の重視」との間に相関が見られたのは、「質素・儉約因子」であった。また、この「質素・儉約因子」は同時に「自己責任」や「愛他性」とも性の相関が見られている。したがって、「質素・儉約」の観念は、男性の中にリーダーシップ・決断力・度胸等を明確に意識するという伝統的男性観の中で生まれているようであり、そのことが女性としての自己に対する責任感とともに、他者に対する関心を高め、尊敬の念や愛他の気持ちを育てることに関連して行くものであると考えられる。また、「計画的な使用因子」も同様に「愛他性」との間に正の相関が見出されている。

「浪費因子」は、「自己責任性」との間に正の相関を得ている。この結果は一見矛盾しているようにも思われるが、今回取り上げた「浪費」は、漠然と無駄遣いをするというのではなく、欲しいものを手に入れるためにお金を使ったり、友人に食事をおごってやったりはするが、金銭使用に際しては、自らの明確な意思決定をもって、つまり、ある種の自己責任を伴って運用しているということが背景に存在していると考えられるので、うなづける結果ではないだろうか。

以上、経済意識と「甘え」や「生活意識」との間にはかなり深い関係があることが明らかになった。したがって、大学生のこの時期に、金銭に対する重要性を意識させ、使用に際しての節約や計画性を考えることの重要性を身に付けさせることは、自分自身の生活意識や人間関係を正しく保ち、他者への気遣いを適正に獲得していくことに大いに役立つと考えられる。このことは、当の本

人の自覚を促す周りの大人達の教育的配慮も重要な役割をもつものだとすることを示唆している。

研究3 中国人大学生女子と日本人大学生女子の経済意識の比較

先行研究（篠原・原崎 2001）において、日本青年は他国の学生に比べ、「非自立の甘え」の意識が高いという結果を得た。その原因を探るために、前述の経済意識に関する質問を中国人大学生に実施し、比較検討をすることとした。

対象 : 日本人大学生女子（福岡市内） 228名

中国人大学生女子（北京市内） 123名

内容 : 甘えに関する質問（30問） 5段階評定

経済観に関する質問（40問） 5段階評定

期間 : 平成13年6月～9月

経済意識に関する40項目の回答結果から、日本と中国それぞれの平均値・標準偏差・検定結果を表8に示している。表から明らかな通り、40項目中、31項目において、両国間に有意差が認められている。

まず、両国それぞれにおいて平均値4.0以上であった項目を見てみることにする。

「日本人大学生女子」（平均）

- ・学費は全て親が出してくれる (4.67)
- ・お金は働いて手に入れるものだ (4.63)
- ・借りたお金はきっちり返す (4.57)
- ・親に経済的負担をかけていると思う (4.55)
- ・もっと自分で稼ぎたい (4.33)
- ・アルバイトの収入は全部自分が使う (4.09)

「中国人大学生女子」

- ・もっと自分で稼ぎたい (4.35)
- ・将来は親の面倒を見ても良い (4.31)
- ・お金は働いて手に入れるものだ (4.30)
- ・親に経済的負担をかけていると思う (4.17)
- ・親に貰ったお金では遊べない (4.14)
- ・人におごるのは気持ちが良い (4.01)

両国ともに登場している項目は、「お金は働いて手に入れるものだ」「親に経済的負担をかけている」「もっと自分で稼ぎたい」の3項目である。両国ともに、親への経済的な依存を意識しており、それゆえに、学生である

表 8. 中国・日本青年の経済意識の有意差

内 容	日 本		中 国		検定
	平均	SD	平均	SD	
学費は全て親が出している	4.67	0.93	3.91	1.22	**
お金は働いて手に入れるものだと思う	4.63	0.70	4.30	0.93	**
借りたお金はきっちり返す	4.57	0.69	3.98	1.09	**
親に経済的な負担をかけていると思う	4.55	0.78	4.17	0.91	**
もっと自分で稼ぎたい	4.33	0.86	4.35	0.91	n.s.
アルバイト等の収入は全部自分が使用する	4.09	1.03	2.91	1.10	**
無駄遣いしないように気を付けている	3.85	1.09	3.66	1.04	n.s.
社会人になったら一人暮らしをしたいと思う	3.83	1.23	2.96	1.34	**
将来は親の面倒を見て良いと思う	3.83	0.96	4.31	0.86	**
貯金をしている	3.75	1.40	3.43	1.24	*
今月はあといくらで暮らさなければと思うことがある	3.64	1.39	3.02	1.19	**
高い物は事前によく調べてから購入する	3.70	1.17	3.95	0.99	*
家庭の経済状態を理解していると思う	3.67	1.05	3.94	1.13	*
習い事や車の免許にかかる費用は親が出してくれる	3.51	1.31	3.10	1.07	**
気に入ったものは高くても買う	3.47	1.11	3.42	1.11	n.s.
買うものをあらかじめ考えてから買い物に行く	3.46	1.19	3.65	1.03	n.s.
成人式などの服にかかる費用は親が出すものだと思う	3.39	1.14	2.93	1.06	**
バスなどを使わずに徒歩・自転車等で用事を済ます	3.31	1.22	2.90	1.12	**
お金をためることが好きだと思う	3.33	1.12	3.58	1.13	*
家庭の経済状況について親と話すことがある	3.30	1.29	3.95	0.99	**
お金がなくなったら親に頼る	3.20	1.29	3.26	1.06	n.s.
アルバイトは生活のためにしている	3.20	1.30	3.14	1.13	n.s.
お金を使うことが好きだ	3.20	1.12	2.85	1.17	**
親にもらったお金では遊べないと思う	3.14	1.10	4.14	1.16	**
旅行に行く時などは親に賤別をもらう	3.16	1.34	3.13	1.15	n.s.
衝動買いが多い	2.88	1.27	3.17	1.11	*
普段でも必要といえば親はお金をくれる	3.11	1.33	3.27	1.22	n.s.
ブランド物には興味が無い	2.93	1.30	2.76	1.02	n.s.
学生の間は親のスネをかじりたいと思う	3.03	1.11	2.60	1.09	**
人におごるのは気持ちが良い	3.01	1.06	4.01	0.94	**
お金のやりくりは慣れている	2.97	1.07	3.73	0.98	**
月に決まった小遣いをもらっている	2.83	1.70	3.48	1.21	**
社会人になっても金銭的に困った時は親を頼ると思う	2.81	1.25	2.26	1.13	**
友人が持っているものがほしくなる	2.73	1.19	2.26	1.17	**
友人らに食事などをおごることがある	2.51	1.08	3.75	0.95	**
友人との旅行等の費用は親が出してくれる	2.43	1.32	3.39	1.13	**
親に借りたお金は必ずしも返さなくてよいと思う	2.26	1.09	2.73	1.16	**
親や兄弟姉妹にお金をあげることがある	2.28	1.24	3.28	1.12	**
化粧品・服は自分のお金で購入する	3.89	1.18	3.34	1.28	**
ギャンブル(スロット、パチンコ等)が好きだ	1.48	0.98	1.58	1.02	n.s.

**・1% *・5% +・10% 水準の有意差を示す NS・有意差なし

という現在の状況においても、できることなら自分で働くことによって収入をもっと得たいと考えている様子が伺える。

次に、両国の違いについて見てみよう。日本においては、「学費は全て親が出す」「アルバイトの収入は全部自分で使用する」等が高いことから、学費のような公的費用に関しては大部分を親が支出し、プライベートで支出する金銭は、自分で調達している様子が見える。その際、アルバイトによる収入は、社会的労働条件の関係から、日本人学生は中国の学生より比較的手軽に手に入れることが可能であり、またその金額も多いことが予想される。

また、中国においては、「将来は親の面倒を見る」「親に貰ったお金では遊べないと思う」等の得点が高く、親に依存していることへの恐縮した気持ちと感謝の意が現

れているものと解釈できる。

次に、重複する項目もあるが、両国の平均値間に0.5以上の差があり、更に1%以上の有意差が見られた項目を挙げると下記のとおりである。

「日本人学生のほうが有意に高い項目」

- ・学費は全て親が出している
- ・借りたお金はきっちり返す
- ・アルバイトの収入は全て自分で使用する
- ・社会人になったら一人暮らしをしたい
- ・今月はあといくらで暮らさねばと思うことがある
- ・社会人になっても金銭的に困ったときは親を頼る
- ・化粧品・服等は自分のお金で購入する

「中国人学生のほうが有意に高い項目」

- ・親に貰ったお金では遊べないと思う
- ・人におごるのは気持ちが良い
- ・家庭の経済状況について親と話すことがある
- ・友人らに食事などをおごることがある
- ・お金のやりくりは慣れている
- ・月に決まった小遣いを貰っている
- ・友人との旅行等の費用は親が出してくれる
- ・親や兄弟姉妹にお金を上げるときがある

以上の比較結果から、前述のように、日本人学生は私的な使用をする場合はアルバイト等により自分で稼いでいる様子が見えるのに対して、中国人学生は、小遣い・旅行等の費用に関しても親からの援助を受けているようである。

また、中国人学生は、家庭内の経済的状況を親と話し、その状況を理解した上で、計画的に金銭を使用しているが、その一方で、「人におごるのは気持ちが良い」「友人らに食事をおごる」「親や兄弟姉妹にお金をあげることがある」というように、他者との交流の中でお金を使うことに快感を覚えている様子も読み取れる。これに対して日本人学生は、「アルバイトの収入は全部自分で使用する」「化粧品・服等は自分のお金で購入する」など、自分自身の身の回りのものを手に入れることに満足感を覚えているという違いを感じる。

以上日本・中国の大学生女子たちの経済意識を比較検討してきたが、経済的に自立している部分が多いように感じられる日本人学生の得点結果であるのに、他国の学生と比べて、「非自立」の意識が高いのはなぜであろうか。

従来、学生時代は、社会人になるべく様々な学びのための猶予期間として、労働や納税の義務が免除されてきた。しかし、今日の日本においては、学業と同程度に、時には、学業以上にアルバイト等に精を出し、高収入を得るといった事態も起こっている。「学生アルバイト」と

いう活動は、収入を得ること以外にも社会人になるための準備体験が含まれていることもあると考えることはできる。しかし、学生にとってアルバイト活動で収入を得るということには、責任感や義務感を伴っていないことも多く、このことが「自立」の意識の向上に、ひいては人間的成長や人間形成に必ずしも結びついているとは言えないと考えられるのではないだろうが。

今回の両国との比較の結果、日本人学生は、自己中心的な経済意識をもっているという特色が浮かび上がってきたように思われる。大学生時代は未だ、未熟な子どもから成熟した大人への過渡期ともなりえていないと考えられるのである。

そこで、社会的に成熟した大人と、青年との比較研究(篠原・原崎 1999をもとにして)をすることにより、青年の特徴について更に検討を進めることにする。

研究4 福祉関係者と青年の甘えや社会的適応の比較検討

- 対象 : 高校・大学女子(福岡市および近郊) 312名
 高校・大学男子(福岡市及び近郊) 214名
 社会福祉士志向者 男性 78名
 社会福祉士志向者 女性 73名
 福祉関係リーダー 男性 43名
 福祉関係リーダー 女性 58名
 内容 : 甘えに関する質問 30問 5段階評定
 社会的適応に関する質問 35問 5段階評定
 期間 : 平成13年2月

社会的適応項目は、篠原・原崎(1999)の研究に基づき、7因子を採用した。

表9は、一般青年、福祉志向者、福祉関係リーダー3群の「甘え」と「社会的適応」の平均値・標準偏差・男女差検定結果を示したものである。

まず、3群それぞれにおける性差を見てみよう。

一般青年の場合『甘え』に関しては、「引っ込み思案の甘え」「責任回避の甘え」「追従の甘え」は男子が高く、「受容・承認を求める甘え」「非自立の甘え」は、女子が高い得点を示している。また、『社会的適応』においては、「自己効力感」と「許容性」で男子が、「社交性」「規律遵守」「満足感」「向社会性」「自己決定力」で女子が高い得点を示すという結果が得られており、男女間に大きな差があることがわかる。

これに対して、福祉志向者の結果を見てみると、『甘え』では、「引っ込み思案の甘え」において男性が高いという性差が見られたのみであり、『社会的適応』においても、「社交性」「自己決定力」「向社会性」において、女性が高いという有意性またはその傾向が見られたのみであった。

更に、福祉関係リーダー群では、「受容・承認を求め

表9. 各集団の「甘え」と「社会的適応」の男女差

	一般青年男子			一般青年女子			T検定	
	平均	SD	人数	平均	SD	人数		
引っ込み思案の甘え	15.23	4.02	214	13.76	4.59	312	3.79	***
受容・承認の甘え	16.83	3.75	214	18.96	3.84	312	-6.30	***
屈折した甘え	15.09	3.88	214	15.43	4.32	312	-0.92	NS
責任回避の甘え	14.50	3.38	214	13.82	3.62	312	2.17	*
非自立の甘え	17.50	3.20	214	18.14	3.44	312	-2.15	*
追従の甘え	14.60	2.98	214	13.77	3.20	312	3.00	**
自己効力感	17.49	4.46	214	16.71	3.97	312	2.10	*
社交性	27.49	5.47	214	29.64	5.00	312	-4.65	***
規律遵守	18.07	3.78	214	18.79	3.59	312	-2.21	*
満足感	16.56	3.93	214	18.08	3.74	312	-4.48	***
向社会性	9.81	2.48	214	10.42	2.16	312	-2.99	**
自己決定力	16.87	3.36	214	17.51	3.31	312	-2.16	*
許容性	8.83	2.35	214	8.06	2.30	312	3.73	***

	福祉リーダー男子			福祉リーダー女子			T検定	
	平均	SD	人数	平均	SD	人数		
引っ込み思案の甘え	13.72	3.72	48	13.44	4.50	58	0.34	NS
受容・承認の甘え	15.33	4.40	48	17.32	4.14	58	-2.37	*
屈折した甘え	13.64	4.93	48	14.25	3.71	58	-0.72	NS
責任回避の甘え	11.06	2.94	48	12.01	3.15	58	-1.58	NS
非自立の甘え	15.31	3.68	48	15.72	4.29	58	-0.52	NS
追従の甘え	12.58	3.59	48	13.44	3.04	58	-1.32	NS
自己効力感	19.36	3.57	47	18.18	3.93	58	1.58	NS
社交性	30.51	4.34	47	30.86	4.09	58	-0.42	NS
規律遵守	20.06	3.31	47	19.91	3.11	58	0.24	NS
満足感	20.61	3.12	47	20.25	3.46	58	0.55	NS
向社会性	10.78	2.05	47	10.86	2.38	58	-0.18	NS
自己決定力	19.14	2.77	47	18.43	2.83	58	1.28	NS
許容性	9.65	2.16	47	9.03	1.59	57	1.67	+

	福祉志向男子			福祉志向女子			T検定	
	平均	SD	人数	平均	SD	人数		
引っ込み思案の甘え	15.05	3.50	78	13.53	4.06	73	2.4522	*
受容・承認の甘え	15.20	3.89	78	16.16	3.61	73	-1.56	NS
屈折した甘え	13.76	3.92	78	14.08	3.99	73	-0.49	NS
責任回避の甘え	11.43	3.24	78	11.36	2.46	73	0.15	NS
非自立の甘え	15.33	3.51	78	15.16	3.67	73	0.29	NS
追従の甘え	13.76	3.20	78	13.10	2.92	73	1.31	NS
自己効力感	18.42	3.60	78	19.34	3.78	73	-1.52	NS
社交性	27.62	5.17	78	29.58	4.74	73	-2.41	*
規律遵守	19.78	3.91	78	19.98	2.73	73	-0.36	NS
満足感	19.32	3.41	78	19.35	3.02	73	-0.06	NS
向社会性	10.26	2.24	78	10.89	2.09	73	-1.77	+
自己決定力	17.30	3.16	78	18.35	3.22	73	-2.01	*
許容性	8.60	2.03	78	8.94	2.16	73	-0.99	NS

***・0.1% **・1% *・5% +・10% 水準の有意差を示す NS・有意差

る甘え」で女性が高く、「許容性」で男性が高いという傾向が見られたにすぎなかった。

以上の諸結果から、福祉事業に携わるための目的を明確に抱き、実際に福祉場で活躍するという経験を持つことは、『甘え』や『社会的適応』において次第に男女間の差がなくなっていっていることがわかる。

次に、『甘え』と『社会的適応』の得点を、青年・福祉志向者・福祉リーダーの3群間で比較してみよう。

その検定結果を表10、11に示している。男女ともに、殆どの『甘え』で、青年の得点が高く、逆に『社会的適

表10. 男子青年と福祉志向成人・福祉機関リーダーの得点比較

甘え及び社会適応項目	①一般青年		②福祉志向		③リーダー		①-②	①-③
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	T検定	T検定
引っ込み思案の甘え	15.23	4.02	15.05	3.50	13.72	3.72	NS	*
受容・承認の甘え	16.83	3.75	15.20	3.89	15.33	4.40	**	*
屈折した甘え	15.09	3.88	13.76	3.92	13.64	4.93	*	*
責任回避の甘え	14.50	3.38	11.43	3.24	11.06	2.94	***	***
非自立の甘え	17.50	3.20	15.33	3.51	15.31	3.68	***	***
追従の甘え	14.60	2.98	13.76	3.20	12.58	3.59	*	***
自己効力感	17.49	4.46	18.42	3.60	19.36	3.57	+	**
社交性	27.49	5.47	27.62	5.17	30.51	4.34	NS	***
規律遵守	18.07	3.78	19.78	3.91	20.06	3.31	***	***
満足感	16.56	3.93	19.32	3.41	20.61	3.12	***	***
向社会性	9.81	2.48	10.26	2.24	10.78	2.05	NS	*
自己決定力	16.87	3.36	17.30	3.16	19.14	2.77	NS	***
許容性	8.83	2.35	8.60	2.03	9.65	2.16	NS	*

***・0.1% **・1% *・5% +・10% 水準の有意差を示す NS・有意差なし

表11. 女子青年と福祉志向成人・福祉機関リーダーの得点比較

甘え及び社会適応項目	①一般青年		②福祉志向		③リーダー		①-②	①-③
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	T検定	T検定
引っ込み思案の甘え	13.76	4.59	13.53	4.06	13.44	4.50	NS	NS
受容・承認の甘え	18.96	3.84	16.16	3.61	17.32	4.14	***	**
屈折した甘え	15.43	4.32	14.08	3.99	14.25	3.71	*	+
責任回避の甘え	13.82	3.62	11.36	2.46	12.01	3.15	***	***
非自立の甘え	18.14	3.44	15.16	3.67	15.72	4.29	***	***
追従の甘え	13.77	3.20	13.10	2.92	13.44	3.04	NS	NS
自己効力感	16.71	3.97	19.34	3.78	18.18	3.93	***	**
社交性	29.64	5.00	29.58	4.74	30.86	4.09	NS	+
規律遵守	18.79	3.59	19.98	2.73	19.91	3.11	**	*
満足感	18.08	3.74	19.35	3.02	20.25	3.46	**	***
向社会性	10.42	2.16	10.89	2.09	10.86	2.38	+	NS
自己決定力	17.51	3.31	18.35	3.22	18.43	2.83	+	*
許容性	8.06	2.30	8.94	2.16	9.03	1.59	**	**

***・0.1% **・1% *・5% +・10% 水準の有意差を示す NS・有意差なし

応] 得点は低いという結果が見られた。特に、男性における青年と福祉関係リーダー間においては、全ての因子において明確な有意差が見られたのである。

青年から社会人へと成長するにしたがって、次第に男女差が消滅し、『甘え』が減少し、『社会的適応』の向上が明確に見られる様になったのである。

まとめ

今回は4つの観点から研究を実施し、その結果と考察を報告した。

1. 出生順位・居住形態との関係

青年の『甘え』は、出生順位と有意な関係がないことが判明した。子どもの数が減少した今日、きょうだい関係は、以前ほどの差を生み出す要素ではなくなったものと思われる。また親と同居しているか、別居して

いるかについては、『甘え』の差は見られなかったが、経済意識には違いが見られた。親との同居者は生活費の必要性が少ないため、自分の身の回りのものや趣味等は自らの判断に基づいて自分でお金の管理をしているが、別居者は、一般的に親に頼っている傾向が見られた。

2. 経済意識と『甘え』『生活意識』との関係

青年の経済意識40項目を因子分析した結果、表4に示すような6因子が抽出された。「すねかじり因子」「計画的使用因子」「浪費因子」等は特に『甘え』や『生活意識』と相関が強く見られた。青年の精神的、社会的発達に大いに影響を及ぼすことが明らかとなった。

3. 中国大学生女子との日本の比較

日中共に、経済面では親に依存していることが多いようであるが、それぞれの項目別に見ると、両国間にその国の社会的、文化的背景を反映するような差が見られた。ことに日本人学生の結果からは、日本人学生の自己中心的経済観が目立ち、未熟な子どもから、成熟した社会人への過渡期となりえていない様子が伺われた。

4. 福祉関係者と青年との比較

大学生→福祉志向者→福祉関係リーダーの順に次第に、『甘え』の男女差が減少すると共に、社会的適応性も向上している様子が明かになった。今回特に福祉関係者に着目したのは、福祉事業に従事する場合の、他者と自己との関係が、『甘え』と大きくかわるのではないかと考えたからである。福祉従事者は、その仕事の内容により、社会的な援助を必要とする人達と接することが多いと考えられる。そのような場合、時には無条件に他者の要求を受け入れたり、他者の甘えに対して適切に対応することも必要となるであろう。また、自らの甘えを克服し、他者の気持ちを大切にする努力も大切なこととなるであろう。まして、福祉関係リーダーとなれば、それらの傾性に加えて、集団をまとめ、引っ張って行くための厳しさも兼ね備えなければならないことから、青年、殊に労働の義務も納税の義務も免除されている大学生との間に差が顕著に現れるものと考えたのである。

大学生という青年期にあるもの達は、自己から他者へ、そして広く社会へと、その関心の目が次第に向けられていかなければならないものであると思われる。自己の甘え表出の抑制から、他者の甘えの受け入れ、そして社会的適応としての成熟したやさしさと厳しさを備えた成人となるよう教育をし、自ら努力していくことが望まれる。

参考文献

- 土居健郎 『甘えの構造』 弘文社 1971
 土居健郎 『「甘え」の思想』 弘文社 1995
 土居健郎 『聖書と「甘え」』 PHP新書 1997
 北山 修他 『日本語臨床3「甘え」について考える』 聖和書店 1999
 篠原しのぶ・原崎聖子『青年の「甘え」と社会的適応に関する調査研究』福岡女学院大学人文学
 研究所紀要 人文学研究 第2輯 1999
 篠原しのぶ・原崎聖子『青年の「甘え」と社会的適応に関する調査研究Ⅱ、Ⅲ 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編 創刊号、第2号
 2000.2001